失言・暴言と雪片（snowflake）

千歳医師会
市立千歳市民病院
伊藤　昭英

新聞を読むことは有益だろうと思うが、読むとだいたい腹が立つことばかりなので、買って読むことは止めて久しい。ニュースは主にネットで眺めるわけだが、政治家から芸能人まで、失言・暴言の類に関する話が多い気がするのはそういう話題が受けるからか、SNSの影響なのか。桜田五輪相がこの方面では人気者のようだが、来年の東京五輪での活躍が期待される水泳選手の病気についての発言をめぐる応酬には考えさせられた。深刻な病気よりも東京五輪の盛り上がりを心配するかのような発言には確かに批判もあるだろうが、ではそもそもどうして五輪相に病気のことを聞くのか？　五輪相の発言が悪いなら、その選手が東京五輪までに回復して出場できるのか、という記事があちこちに出ているのも駄目なのではないか？　麻生財務相も失言で有名で、最近では少子高齢化について「子供を産まなかった方が問題」と言って撤回に追い込まれた。子供がいない人（私も含まれる）に対する暴言というわけだ。しかしこれも、報道された発言を読む限りでは、少子高齢化の問題について、高齢化が悪いわけではなくて少子化の方が問題だと述べただけともとれる。まあこの方は他にもセクハラ擁護ともとれる発言などいろいろ物議を醸してきたので頑迷で時代遅れというイメージにはまりやすいのだろう。ただしこの方は失言で騒がれるのを楽しんでいるようにも見え、強い人だな、と感心する。

米国ではトランプ大統領が女性蔑視、人種差別ととられる発言を連発しているが、一向に人気が衰える気配がない。トランプ支持の人たちは、彼の「暴言」によって傷つけられた、と言い立てる人たちを「snowflake」と呼んで軽侮しているとか。元来は、雪の結晶は全て形が異なることから、人それぞれ皆特別な存在なのだといういい意味の言葉だったらしい。それが自分のことを特別だと思っている人、という意味になり、最近は政治的意味を帯びてきたとネット上のLuke氏の解説にある。悪口としてはあまりインパクトのない言葉のような気もするが、英語国民の感覚はどうなのだろう。私の小学校での担任の先生が、「人は皆違う。違う点の中で他の人から見ていいな、と思える部分を個性というのであって、違うだけでは個性とは言わない」と仰っていたのをなぜかよく覚えているが、今では政治的色彩を帯びるのかもしれない。

政治家の失言は国会で野党がかみついたりするので、全国紙、TVのキー局など大手メディアでも取り上げられるが、芸能人だとSNSで罵詈雑言を浴びせられる。それをまたポータルサイトや場合によっては大手メディアが取り上げるので、SNSを使いこなせない私でもつい目にしてしまうが、非難する人の方が独善的に映る場合もあり、結局喜んでいるのは炎上して注目を集める側なのかと思ってしまう。しかしSNSなどの匿名の発言というのは、お高くとまるわけではないが、どうしてああもクズとかボケとか汚い言葉を使うのだろう。デジタルメディア出現以前は、こういう発言は（やはり汚くなるが）「便所の落書き」で、非常に気の利いたものもあるがわざわざ見に行くものでもない。と言いながらついクリックしてしまうので、どうでもいいような記事が減らないのだろうな…。

医者も「心ない言葉」で患者を傷つけないように細心の注意がいる。自分もずいぶん後悔してきたが、記憶に残る例としては、外来で20代後半の男性患者に検査結果を説明して、「治る病気だがしばらく入院しなければならない」という話をしたことがあった。彼にさらに話を聞くと、職業はいわゆるフリーターで、経済的にはやや心配とのことだったので、「この病気の場合、入院費はほぼ公費負担ですよ」というようなことを話して同意をもらい、病棟に電話をしてリーダー看護師に空床を確かめたところ、差額室料のかかる個室しかない、という。お金の心配の話をしていたところだったのでつい、当人の目の前で「有料個室って感じの人じゃないね～」と言ってしまった。まずい！と思ったが、何とか大部屋が近々空いたら入院という話をまとめ、「いや～お金は大事だからね」とか何とか取り繕った。あとで病棟に上がり、電話の相手の看護師に「あれ、本人の目の前で言っちゃって冷汗だったよ」と言ったら彼女はケラケラ笑って、「最悪の接遇の見本ですね～師長に言いつけちゃいますよ」と言っていた。そんな無作法な主治医ながら、その方は紳士的に入院治療を全うしてくださいました。彼がsnowflakeの逆のタイプで助かった。